SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

天竜市二俣小学校周辺の自然観察コース

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2018-07-23
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 櫻井, 貞彦
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00025546

静岡地学　第46号（1982）

天竜市二俣小学校周辺の自然観察コース

櫻　井　貞　彦*

地域の自然を教材として活用するということの大切さが、最近盛んに叫ばれている。私の勤務している天竜市二俣小学校の近くには、まだかなりの自然が残っている。この自然を教材として生かすための自然観察のコース作りをしてみた。このコース（図１）について簡単に紹介する。

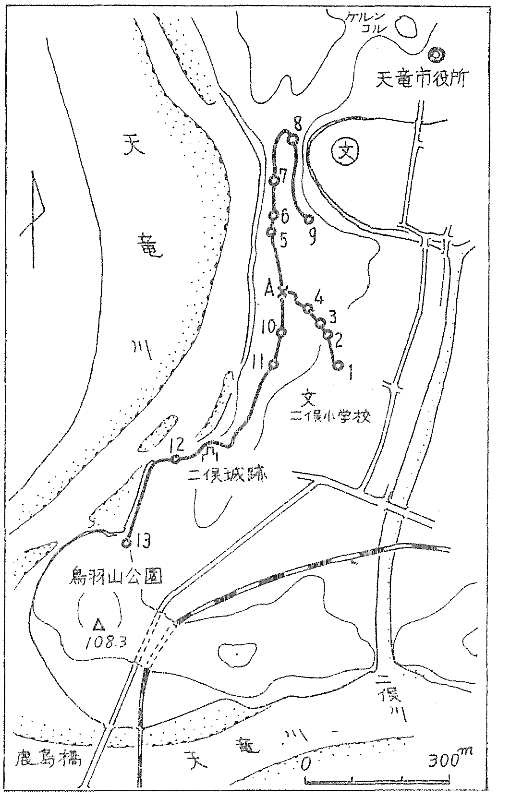

図１　自然観察コース

１．地層の不整合

学校の北側に小さい露頭がある。ここは第三紀中新世の地層である二俣泥層の上に、第四紀洪積世の段丘礫層が、不整合に重なった露頭である。ここでは不整合の学習をすると同時に、礫層中の各種の礫の観察から、岩石の風化の学習も実施するとよい。（花崗岩の礫などは、手で簡単にくずれる程に風化が進んでいる。）

２．照　葉　樹　林

不整合の露頭から細道を100ｍ程登った所は、二次林でしかも小規模なものではあるが、シイやアオキなどが自生する照葉樹林になっている。地表に積った落葉を掘り返すと、くもの巣の様にのびた真白な菌糸が拡がっている。その近くの地表には地衣類やこけ類が一面に地表を覆い、ジャノヒゲやヤブラン・フユイチゴなどの背の低い下草と、ヤブミョウガ・イノコヅチなどの背の高い下草が繁り、アオキ・ヒサカキ・イヌビワなど低木類がその上を覆い、10ｍ以上も高い空間には、シイの枝が森全体の屋根を構成している。ここでは森林の生態について学習するとよい。

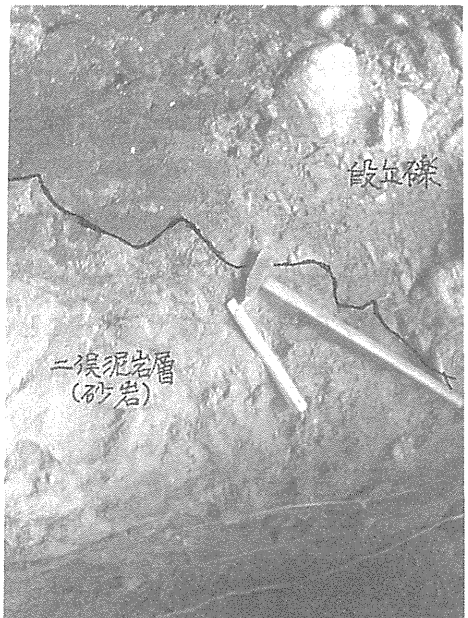

写真１　地点１の不整合

３．腐　　殖　　土

この森の中の道の横に真黒な土の小さい露頭がある。これは永年積った落葉が腐って出来た腐殖である。土の成因と同時に、生きている森林の栄養のバランスについて説明するのによい露頭である。

*天竜市立二俣小学校

4．幼年期の谷

細い道の横は、常には水の流れていない谷である。この谷は大雨の時にはかなりの勢いで水が流れ側方がかなり浸食されている。この道を登りつめた所で谷の成因について説明するとよい。

5．天竜川の蛇行流路

坂道を登りつめて、皆原（ミナバラ）という集落を通り過ぎた所で、T字道路にぶつかる。ここをA地点とする。ここでコースが二つに分かれる。ここから150 m程北上すると、天竜川の曲流が眼下に望見される地点に着く。手前側は勢いよく瀬音を立てて岸にぶつかっている攻撃斜面、対岸は河原が広がる滑走斜面である。ここは川の蛇行についての説明をするのによい地点である。

6．岩石の風化

50 m程坂道を下ると、段立礫層をけずり採った跡地に着く。ここではかなり風化の進んだ礫が多数見つかる。丹念に探すと見事な玉ねぎ状風化の標本も手に入れることが出来る。礫を割って礫の表面と中の色の違いを見ながら、岩石の風化の様子を説明するのによい場所である。

7．地層の不整合

次にまた坂を100 m程下った所の道の横の崖に、不整合の露頭がある。基盤になっているのは三波川の結晶片岩で、その上に洪積層の段丘礫層が不整合に堆積している。堆積した時代の違いを含めて学校の横の不整合と比較させるのはおもしろい。

8．河　川　跡

更に150 m程下って三叉路に出る。この地点は展望の良い所で、二俣川の旧流路が眼下に眺められる。昭和の初期に現在の二光（ニコウ）滝の地点で山をきり開いて現在の流路を流れる様になった二俣川の旧河川跡が、現在も小さな堀の様な状態になって残っている。この流路は大きな蛇行部分でもあるので、そのことについても説明を加えるとよい。

写真2　旧二俣川の流路

9．断　層　地　形

次にこれから250 m程下った地点から北の方を見ると、天竜市役所の建物が見える。その西側に鉄筋コンクリート建の住宅団地が見える。その裏側の山を見ると、山が小さな谷で切られて断層地形のケルンバットとケルンコルが観察できる。これは赤石裂線の断層破砕帯に沿った地域の地形なので、断層破砕帯のことや、赤石裂線について説明するのに良い地点である。

10. 虫のえさ場

ここからさきほどのA地点にもどり、皆原（ミナバラ）の段丘礫層の崖に沿って100m程南下する。道の横に、エノキ・アカメガシワなどの高木に、アケビなどのつる植物が巻きついて、中に入るのをちゅうちょさせる様な繁みがある。ここの道ばたのアカメガシワの幹には、何カ所も小さなきずがあり、そこから樹液を出しているので、樹液を吸う昆虫にとって良いえさ場になっている。運が良いとチョウ・カブトムシ・コガネムシ・アリなどの何種類もの昆虫達が集まって樹液を吸っている。実に平和な光景にぶつかることがある。

写真3　赤石裂線による断層地形

11. 二俣盆地の展望

虫達の食堂から100m程南下した所で眼下に二俣小学校が見える地点に着く。ここからは二俣の市街地が一望のもとに眺められる。二俣の市街地は周囲を100m前後の小高い山々に囲まれた小さな盆地状である。周囲の山々の中腹には、旧天竜川の段丘礫層が厚く堆積している。ここではこの段丘礫層の分布についての説明をした上で、二俣の盆地の成因について説明するのに好適の場所である。

12. 天竜川の激流

11の地点から300m程南に下がると、戦国時代武田・徳川の合戦で落城した二俣城跡に着く。戦国の昔のつわものどもに想いを馳せながら、城の裏側の藪の中の道を下って行くと、ごろごろと礫のころがり出る段丘礫層は、いつの間にか風化してぼろぼろになった三波川結晶片岩の地層に変わっている。やっとわかる程の踏み分け道を200m程下った地点に来ると、天竜川の瀬音が激しく聞えてくる。ここで足元に気を付けながら下を見ると、そこは天竜川の水が勢いよく岩にぶつかっている川の蛇行の攻撃斜面になっている。天竜川の水が岩にぶつかって白波を立てて渦巻いている姿を見て、水の力の強さを目のあたり実感としてとらえられるよい教材である。

13. 旧二俣川の河口

さらに20m程歩くと、すべすべした結晶片岩の上を滑る様に通り提防の上に下り立つ。ここは今から190年程前、二俣川にきり割りを造って、現在の流路になる前の二俣川の河口である。現在は広い河原になってしまって、河口らしい面影はほとんど見当たらない。ただ二俣の盆地をとり囲む山地が、城山（シロヤマ）と鳥羽山（トバヤマ）の間にあるこの地点約150m程の間だけなく盆地からの水の流出口だった地形的な証となっている。この付近を今でも川口という名で呼んでいる。又ここの河原で天竜川の岩石について学習させるのもよい。

以上は、約2時間程の予定で観察させるのに良い学校付近の野外観察のコースの一つである。自然は季節のうつりかわりに応じて、それぞれに装いを変えるので観察の季節はいつでもよい。